



Title	パンジャーブ協会に於けるウルドゥー詩刷新の試み (V)
Author(s)	松村, 耕光
Citation	大阪外国語大学論集. 1992, 7, p. 103-123
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79569
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

パンジャーブ協会に於けるウルドゥー詩刷新の試み (V)

松村 耕 光

The Anjuman-e Panjab and Its Efforts to Reform Urdu Poetry (V)

Takamitsu MATSUMURA

Contents:

Supplementary notes to Chapters 1 and 2

Supplement to Chapter 3

Translation of Azad's lecture delivered on 19 April 1874

第1章 歴史的背景 補註

(1) パンジャーブ協会の会誌について (172ページ参照)

アブドゥッサラーム・クールシードによると、1865年に刊行されたパンジャーブ協会の雑誌は、1870年4月1日に Humā-e Panjāb と名を変えて発行され、1871年にはさらに Akhbār-e Anjuman-e Panjāb という名称に変更された。

‘Abd al-Salām Khūrshīd, “Urdū ṣahāfat 1851 se 1962 tak”, (*Nuqūsh*, Lahore number, Lahore, 1962 所収)

(2) 詩会開催にいたる歴史的背景について (179ページ以下)

詩会が開催されるについては、パンジャーブ州知事 Robert Henry Davies (在位1871—1877年)の意向が働いていたことについて本文中で触れたが、この点について新たに資料を入手したのでここで紹介しておく。

第1章本文中にあるように、1874年4月19日の講演会でパンジャーブ州公教育局長ホルロイドは講演を行ない、その中で、州知事の指示を伝える事務次官からの通信を紹介している。その中に、「州知事閣下は、委員会が一言も述べておらず、また、閣下の観点からはこの国の教育局の役職にある者にとって考慮すべきであるもう一つの問題について指示されていますが、それは、

現在用いられている、あるいは教えるよう委員会が推薦したウルドゥー語の教科書には、ウルドゥー語の詩が全くないという問題です」という一節があるが、この中で言及されている委員会というのは、パンジャブ州の教科書を改定するために設けられた委員会である。

この委員会は、1873年2月18日、1871年から1872年にかけての教育報告を受け、教科書の全面改定の必要を感じたパンジャブ州知事によって設置が決定された。(Punjab Home Proceedings, February, 1873) 委員会は3月6日に第1回会合を開き、5月3日に第5回会合を開いた。委員会は、ペルシャ語、ウルドゥー語、アラビア語、英語、ヒンディー語、サンスクリット語、歴史、地理、数学の教科書について検討し、改善策を答申した。これは、5月9日に公教育局を通じて事務次官に報告された。(J. G. Cordery, Officiating Director of Public Instruction, Punjab to The Secretary to Government, Punjab, No.115, Lahore, 9 May 1873)

この報告書に対する事務次官からの返事は、12月3日になされた。ホルロイドが講演の中で紹介しているのはこの返事である。(T. H. Thornton, Secretary to Government, Punjab to The Officiating Director of Public Instruction, Punjab, No.4516, 3 December 1873) 第1章本文中で、この通信はホルロイド宛のものとしたが、誤りであるので訂正する。

本文中での引用は、ムハンマド・サーディクの論文「アーザードと詩会」(Muḥammad Ṣādiq, “Āzād aur bazm-e mushā’irah”) より行なったが、その後当該箇所の英語原文を入手したので次に掲げておく。

His Honor would now remark upon a subject which has not been touched upon by the Committee, but which seems to the Lieutenant – Governor worthy of the consideration of those who conduct the Educational Department of this Province. It is the almost total absence of *Urdu Poetry* from the selection contained in the Urdu text – books now in use, or recommended by the Committee; yet the value of poetry as a means of education cannot be doubted; while the number and variety of native popular songs and ballads current in the Province, — some of them recited by mirāsīs at village gatherings, or by hereditary bards, others sung by the members of a household on occasions of domestic festivity or sorrow, — show how fully the natives of the Punjab appreciate and make use of poetry in the expression of joy, of sorrow, or of satire. Under these circumstances I am to suggest for your consideration whether it would not be possible to introduce into the course of instruction in our village and zillah schools a book of Urdu poetical selections of a moral, didactic, or descriptive character. Possibly, selections of this character might be made from the works of Sauda, Mír Taki, Miskín, Zauq or Ghálib. Should such selection be unobtainable from the authors above—mentioned or from other extant poems, I am to enquire whether it would be possible to arrange for the preparation of a volume of poems

composed expressly for the use of schools by poets of the present day. If in this way the Government school could be made the means of improving the moral tone of native secular poetry, and gradually supplanting the puerile effusions now too current, a very good work would be accomplished.

Punjab Home Proceedings (December, 1873) より。

インド政府もまた教科書の改定に関心を示していた。

1873年3月29日の *Proceedings of the Government of India, Home Department (Education)* によると、インド総督ノースブルック (Northbrook 在任期間1872—1876年) は、初等教育の教科書は生徒の理解と日常の経験の範囲内にあるべきであるとの見解を表明し、教科書の全面的改定が必要であると述べている。そして委員会を設置してこの問題を検討し、報告書を提出するよう各州政府に命じている。(これに対してパンジャブ政府は、1873年12月3日に、先ほど触れた委員会の報告書とそれに対する州政府の返事とをインド政府に送付している。)

(3) British Indian AssociationによるVernacular University 設立の請願 (1867年8月1日) に対するインド政府の回答 (1867年9月5日) について (180ページ参照)

インド政府事務次官 E. C. Bayley の名で送られた British Indian Association への回答の内容は、およそ次のようなものであった。

- 1) 教育用語としての現地諸語の重要性は、1854年の Education Despatch で確認されている。
- 2) この Education Despatch では、インド諸語を英語に変えてしまおうという目的も意図もないことが明言されている。高等教育を受けられない者や外国語の難しさを克服できない者に対しては、西欧の知識は現地語によってのみ伝達され得る。ただし、高等教育を望む者には英語の知識が不可欠である。
- 3) Education Despatch にあるように、ヨーロッパの作品の東洋諸語への翻訳が不足していたために英語を習得する必要があったが、ヨーロッパの書物からの翻訳やヨーロッパの進歩的精神を吹き込まれた人々の創作によってインドの現地語文献が豊富になれば、ヨーロッパの知識は次第にあらゆる人々の手の届くところに来るであろう。
- 4) インド総督はアリーガル科学協会の活動に非常に満足している。
- 5) インド総督はインド諸語がより高等な教育の手段となるのを望んでいる。
- 6) 大学の教科書の大部分はインド諸語に翻訳されていない。しかしこれを翻訳すれば十分という訳ではない。大学教育の目的は或る特定の書物を学ぶだけでなく、ヨーロッパの科学、文学について広い知識を追求する精神を育成することにあるからである。当分の間、この

目的は英語によってのみ達成され得るであろう。

- 7) 科学協会と政府が共通に抱いている目的を促進させるために団体や個人によってなされたあらゆる努力を州政府とともに総督もまた喜んで認め、援助するつもりであり、この問題についての提案を喜んで受け入れ、検討するつもりである。
- 8) インドのように人口の多い国に対して教育費用を政府が負担するのは、たとえ望ましいことであっても、現実的には不可能である。政府は、富裕な階層の時間、資金、影響力をあてにせざるを得ない。

以上が、British Indian Association の請願に対するインド政府の回答である。

尚、請願書や回答書は、次の資料に収録されている。

Selections from Educational Records, Vol.2, New Delhi, National Archives of India, 1963.

この回答書の中で言及されている1854年の Education Despatch というのは、1854年7月19日、監督局長官（President of the Board of Control）であったチャールズ・ウッド（Charles Wood）によって発せられたもので、インド教育史上きわめて大きな役割を果たした。

この Education Despatch の大きな特徴の一つは、マコーレーらの、いわゆる downward filtration theory に基づく教育政策——インド人全体に教育を施すのは不可能であるので、まずインド人のエリートに英語で教育を授けることとし、一般大衆の教育は、このエリートにインドの言語を用いて行なわせようとする政策——を見直し、インド諸語による公教育の充実を謳っている点にある。第1章本文中で、「カルカッタ中央のインド政庁もまた、1860年代後半以降、インド諸語に好意的になってきていた」と記したが、現実にはなかなか実施されなかったにせよ、原則的には1854年にインド諸語を考慮する姿勢が中央レベルで確立されていたわけである。

(4) インド総督メイヨーのムスリムに対する教育政策について（180ページ参照）

メイヨーは、1871年8月7日、ムスリムの教育問題に注意を喚起し、公立の学校、カレッジに於けるムスリムの古典語、地域語の奨励と英語教育を行なう学校に英語を話すムスリムを採用することを要請した。（Home Department Resolution Nos.300—310）

メイヨーは、1872年1月24日に暗殺されたが、メイヨーのこの1871年の決定は、メイヨーを継いだノースブルックによって再確認され、1873年6月13日、各地方政府に通達された。（Home Department Notifications —— Education No.7 —— 238—247）

この中でも、ムスリムの地域語文献の振興に関して、ムスリムの重要な著作の印刷、発行を奨励するために質の高い教科書のシリーズを作成すること、外国作品の翻訳や創造的試みに賞金を授与することが望ましいと述べられており、教科書編纂が重要視されている。

(5) 『アーザード論文集』について (182ページ参照)

『アーザード論文集』は、第3巻までであることが後に判明した。第3巻は、1987年に、第1巻、第2巻と同じく、ラホールの Majlis-e Taraqqī-e Adab より出版されている。

第2章 ムハンマド・フサイン・アーザード 補註

(1) 『忠告の耳飾り』について (106ページ参照)

その後入手した『忠告の耳飾り』(デリーの Azad Book Depot より1945年に出版されたもの)では、粗筋は以下の如くである――

ミルザー・シャリーフというイラン人の商人がインドに来て結婚する。やがて娘が生まれ、サイーダと名づける。中国にある支社から中国に来て欲しいという依頼があり、女子にも教育が必要であると妻を説得し、娘をきちんと教育するよう妻に命じてミルザーは出発する。ミルザーは行く先々での様子を娘に書き送る。サイーダは勉強のかいあって文字が書けるようになる。中国での仕事を終えてミルザーが帰国すると、インドの歴史について読んだり、手紙の代筆をしてやりたりしてサイーダは評判となっており、縁談が舞い込んでいた。名門の息子との縁談がまとまり、結婚式につきものの浪費をすることもなく、結婚式が行なわれる。

(2) アーザードの詩集について (108ページ参照)

『アーザードの酒場』は、1932年、アーガー・ムハンマド・ターヒルの編集で、デリーより出版された。(『アーザード詩集』は、ムハンマド・イブラーヒーム編集による初版、第二版、アーガー・ムハンマド・ターヒル編集による第三版、ムムターズ・アリー版、すべてラホールより出版されている)

尚、『アーザード詩集』や『アーザードの酒場』についての詳しい検討は稿を改めて行なう予定。

(3) パンジャブ協会の詩会について (115ページ参照)

『アーザードの酒場』のアーガー・ムハンマド・ターヒルの序文によると、1867年8月、パンジャブ協会でライトナーの後援のもと、アーザードは詩会を始めた。これはガザルの詩会であったようである――

「すなわち、1867年8月、パンジャブ協会の名によって、ライトナー博士の後援のもと、アーザードは詩会を始めた。ガザルを詠むことにはうんざりしてしまっていたが、しかし、その昔からの習わしを捨てたり、捨てさせたりすることはたやすいことではなかった。この詩会には詩の愛好者達が宗教や民族に囚われることなく、続々と参加した。と言うか、アーザード自らが彼らを大事に連れてきていたのであった。」

アーザードの「ベルシャ語とウルドゥー語の散文について」という講演の中で言及されている

詩会というのは、このガザルの詩会を指すものと思われる。

第3章 パンジャープ協会の詩会 補論

詩会で発表された詩は、パンジャープ協会会報の付録として、『グルダスタ』(Guldastah 花束) という名で出版されていた。これは現在入手困難で、筆者も未見であるが、サフィヤ・バーノーは、下記の書の中でこの『グルダスタ』を用いて詩会で発表された詩を検討・紹介しているので、サフィヤ・バーノーのこの書に基づいて以下にアーザード、ハーリー以外の詩人の発表した作品のいくつかについて、その要点を簡単に紹介しておくことにしたい。

Safiyah Bānō, *Anjuman-e Panjāb: Tārīkh-o-Khidmāt*, Karachi, 1978.

第1回詩会(1874年5月30日 詩題「雨季」)

サフィヤ・バーノーによると、この詩会については詳細が不明であるが、第7回詩会を記録したパンジャープ協会会報付録にはマウラヴィー・ウマル・ジャーノ・ワリー(Maulavī ‘Umar Jān Walī)の雨季に関するマスナヴィーが収録されている。「雨季についてのこの詩はとても美しい。そして風景描写はその極みに達している。まず暑さの世界とその情景があり、雨季の訪れの影響、雨雲のどンドン覆う様、冷たい風の吹く様、雨の春、雨季の夜の美しい情景、暗闇の蛍の光、河が激しく流れる様、友人達が散策に出かける様、雨季の料理を友人達が争って食べる様、マンゴの香りと草の香り、庭のブランコ、と雨季の有様が大変美しく写実されている。」

(サフィヤ・バーノー、上掲書、p.239)

尚、この詩人の名は、第2回詩会について書かれたカイフィーの論文「ウルドゥー最初の詩会」(Urdū ka pahlā mushā‘irah)では、Maulavī Ammū Jān Walī Dehlvi、第3回詩会から第8回詩会までの参加詩人について記されたアーガー・ムハンマド・バーキルの「自然の詩」(Nēchar ki shā‘iri)では、Maulavī ‘Ammūn Jān Walī Dehlviとなっている。

第2回詩会(1874年6月30日 詩題「冬」)

サフィヤ・バーノーは、『グルダスタ』2号に、グラーム・ナビー・アスガル(Ghulām Nabī Aşghar)の、冬の支配を描いた28詩句からなるマスナヴィーが掲載されているとして簡単に紹介しているが、カイフィーの論文「ウルドゥー最初の詩会」にはこの詩人の名は見えない。

尚、カイフィーはこの論文中でアーザード以外の6名の詩人の作品を引用しているが、いずれも冬の到来を描写した叙景詩である。

第3回詩会(1874年8月3日 詩題「希望」)

サフィヤ・バーノーは、アーザード、ハーリーの他、8名の詩人の作品について記している。ただし、ムハンマド・バーキルの「自然の詩」^{ネチャール}に挙げられている10名の参加詩人の内1名についてサフィヤ・バーノーは触れていない。また、逆に「自然の詩」^{ネチャール}には記されていないマウラヴィー・アラウッディーン・サーフィー (Maulavī 'Alāuddīn Ṣāfi) という詩人にサフィヤ・バーノーは言及している。

大部分は、希望を称賛したり、人々の様々な希望について書いた詩である。1874年8月8日付の『パンジャービー・アクバル』が高く評価しているミルザー・アシュラフ・ベグ (Mirzā Ashraf Bēg) の「春の希望」 (Ummīd-e bahār) というマスナヴィーは、サフィヤ・バーノーによると、次のような内容である。

「24詩句で希望に目を向けたくない生き物はいないということが示され、8詩句で希望の称賛がなされる。そして例が挙げられる。」「14詩句で希望の喜びが歌われる。そして王は民衆をどのように喜ばせるかということ、そして敵との戦争があると希望によってのみ勝利が得られるということが歌われる。」「当時、イギリス人はアウラングゼーブを激しく嫌っていたが、アウラングゼーブが大変賛美されている。マフムード・ガズナヴィー、フィルドウスイー、学生そして商人も希望の故にのみ事を為すのである。(この部分を詩人は非常に詳しく詩にしている。) 近代の学問も論題にされている。」「東インド会社の話も出てくる。それは何かの希望があったからこそ支配を確立し、そして鉄道網を張り巡らしたのである。船長、庭師、そして病人ですら最後まで希望の裾を放さない。」「死に際しては解脱の希望がある。母は一体どのような希望をもって子供を育てていることか。終わりに、希望の喜びのためにこそ詩作するのだ、という詩人の胸の内が明らかにされている。」(サフィヤ・バーノー、上掲書、pp.258-259.)

尚、*Maqālāt-e Garcin de Tassy*, vol.2 p.36では、この詩の題名は「希望の新春」 (Nau bahār-e ummīd) となっている。

第4回詩会 (1874年9月1日 詩題「愛国心、郷土愛」)

この詩会には、アーザード、ハーリーを含めて13名の詩人が参加した。

故郷を愛しているのは人間だけではない、動物であれ、植物であれ故郷を愛していると歌う詩が多いが、パンディット・クリシャン・ラール・ターリブ (Pandit̄ Krishan Lāl Ṭalib) は、サフィヤ・バーノーによると次のような興味深い詩を発表している。

「この詩には1857年の出来事への言及とほのめかしとがある。そして同時に愛国心が嘲笑されてもいる。或る所ではそれは欺瞞の罟と呼ばれ、時には、国への貢献は最高の奉仕、特に、国の人々への貢献は大きな意義があると賛美してもいる。クリシャン・ラール氏は、1857年の騒乱に対する羞恥の念を明らかにしているようであり、バハードゥル・シャー・ザファルへの嘲笑も見られる。」(サフィヤ・バーノー、上掲書、pp.268-269)

また、本当の故郷は彼岸にあるとして、「この世のあらゆる喜び、愛、物、感情ははかない。

必要なのは、生きている内に我々の真の故郷である来世を思うことである。夢の中に郷土愛の感情が化身となって現れ、こう言った——このはかない世界を故郷と言ってはならぬ。汝の真の故郷は、実は、汝が生まれる前にいた所をいうのである」という内容の詩を書いた詩人（アンワル・フサイン・フマー Anwar Husain Humā）もいる。もう一人の詩人（ミスル・ラーム・ダース・カービル Miṣr Rām Dās Qābil）も同趣旨の詩をベルシャ語で発表している。

マウラヴィー・アターウッラー・カーン・アター (Maulavī ‘Aṭāullāh Khān ‘Aṭā) は、「昨今、下品で卑しい者達がこの世の富と名声を得ようとして、祖国、祖国とよばわっており、何とかして名声を得ようとしている。初めも終わりも知らず、朝から晩まで努力をし、そして協会で名が高まるようにと愛国心について詩を書いて持ってきている」と挑発的な詩を発表している。

第5回詩会（1874年10月9日 詩題「平和」）

サフィヤ・バーノーは、アーザードを含めて11名の詩人の名を挙げている。（「^{ネチャー}自然の詩」では参加詩人は10名。）

平和の重要性を直接的に訴える作品もあれば、物語仕立の詩を書いている者もいる。例えばグル・ムハンマド・アーリー (Gul Muḥammad ‘Ālī) は、自国に平和を維持している王は死んでも土とならないという話が自分の宮廷で話されているのを聞いたカリーフ・マームーン・ラシードが、これが本当かどうか確かめるべく、ノウシェールワーン王（イランの名君）の墓を発掘させたところ、王はたった今眠りについたかのようにであった、という内容の詩を発表している。

興味深いのはハキール (Ḥaqīr) の詩で、これはインド大反乱後のラックナウーの悲惨な状況を歌い、「どのように虐殺が行なわれ、人々が町を捨てて逃げ、家が襲われたか、そして平和の宣言がなされるとどのように人々が親しい人達の無惨な遺体を埋葬し、散り散りになった者達が巡り会い、町にまた人が住み着くようになったか、ということ述べている。」（サフィヤ・バーノー、上掲書、p.292）

アターは、次のような詩を発表している。

「この詩の中で彼は以下のような考えを書き記している。すなわち、平和があると口では言っているが、この世には常に無秩序と混乱があった。カイバル峠を見よ。今尚そこを通る隊商は泣いている。積荷を奪われて殺されてしまうのだ。」「おお、平和よ。ここに来たれ。汝は国の総督。汝の下には外国の主人達がいる。今一度、あのように大砲に弾をつめて反乱の軍勢を壊滅させるのだ。汝は民衆を征服した。貴賤なく皆祈りを捧げているのだ。」「昨日私は、汝は何処に居るのか、と反乱に尋ねた。すると反乱は答えた——私は至る所にいたし、今もいる。しかし、私は賢いので家から家へと隠れているのだ。私はどの心の中にもいる。しかし姿は現さない。おお、平和よ。汝は国中で人気がある。旅行者、王、乞食、あらゆる者が汝を求めている。しかし、もし何処かに汝の存在があるとすれば、それは天国なのだ。」（サフィヤ・バーノー、上掲書、

p.294)

第6回詩会 (1874年11月14日 詩題「正義」)

統治者の公正さを称賛する詩や統治には正義が必要であると訴える詩が中心。例えば、フマーは次のような内容の詩を発表している。

「王は正義を行なってこそ称賛される。おお、ペンよ、正義を賛美せよ。神は正義なる者であり、正義を行なう者を好まれるのだ。正義によって世界には平和が存続し、民衆は喜ぶ。王がいくら賢明であろうと、もし正義を望まないならば、すぐにその支配の衰退が始まるのだ。以前、パンジャブは圧政の住処であった。しかしヴィクトリア女王の統治が始まってからは、パンジャブは正義の住処となった。そして協会では正義について詩会が行なわれている。神がヴィクトリア女王をお守りになりますように、そして永遠にその帝国が存続しますように。」(サフィヤ・バーノー、上掲書、pp.304-305)

アターは、以下のような、批判的な内容の詩を発表している。

「いつものように神の賛美から始め、その後、被造物を神の息子と呼ぶのは誤りであると三位一体説への反論を記している。今やムスリムは合理的法則に傾倒しているが、しかしムスリムはイスラームから、そしてキリスト教徒は福音書から逸脱してしまっているというのが現状である。ここには正義が打ち立てられつつあるとは言うものの、家が泥棒に襲われているというのに、裁判所や裁判所員に振り回されて被害者自身が疲れ果ててしまうのだ。弁護士は仲介業者になってしまっている。」「詩人達とはいうと、新聞の者達によってからかわれているような有様である。政府は年金を与えると約束したが、職も得られないのに年金などどうして得られようか。それから政府の者達に対して正義の要請がなされ、正義の利点が記されている。」(サフィヤ・バーノー、上掲書、pp.309-310)

第7回詩会 (1874年12月19日 詩題「仁徳」)

サフィヤ・バーノーによるとこの詩会には15名の詩人が参加した。(「自然の詩」では14名)どの詩人も仁徳を賛美する詩を発表している。

「最初にグル・ムハンマド・アーリーがマズナヴィーを詠んだ。その冒頭はキタで始められている。9詩句のこのキタは、仁徳を賛美するものである。その後、51の詩句と41の詩句でフィールドウスイーの『王書』から二つの物語を詩にしている。一つはハーティム・ターイーであり、もう一つはバフラーム・ゴールの物語で、それぞれ仁徳と寛大さで有名である。」(サフィヤ・バーノー、上掲書、p.315)

「シャイク・イラヒーバクシュ・ラフィーク (Shaikh Ilāhī Bakhsh Rafiq) の番が来ると、彼は107詩句からなるマズナヴィーを発表した。その内容は次のようなものであった——友人達の冷淡さや天の意地の悪さのために私は隠遁者となってしまっていた。絶望の中にいると声がし

た。この災難の時に汝を助けるために導師『知恵』が来た、と。私は彼に世の無理解を訴えた。彼は、私と一緒に来なさい、汝に『仁徳』の聖なる世界を見せてやろう、と言った。私達は出発した。『希望』が援助を与えてくれ、そしてとてもきれいな庭園のある所へ連れていってくれた。そこには大きくて壮麗な建物があつた。その中には霊廟があつた。私は心からコーランの章句を唱えた。見ると墓の側で『友愛』が立って泣いていた。『友愛』は、これはハーティムの墓です、と教えてくれた。すると『仁徳』の王が現れ、こう言った。この庭はこの人が作ったもので、この人自身がここに埋葬されているのです。何故なら盗賊の一隊がこの人を殺したからなのです。今や私はここの番人なのです、と。」「この後、詩人は仁徳のなきの欠点を述べる。誰も他人に対して思いやりのない、と。もっともパンジャブに確立された政府には仁徳の威光がある。パンジャブ協会が設立され、数多くの改革が実施された。学校が建てられ、農業が発展した。今やパンジャブの大地は天国の見本となっている。」(サフィヤ・バーノー、上掲書、p.320)

「ミール・アンワル・フサイン・フマー (Mir Anwar Husain Humā) は20連のムサッダスを詠んだ。その中の9連はペルシャ語である。このムサッダスは、実のところ、仁徳に事寄せたヴィクトリア女王へのカスィーダで、女王の統治によってインドに平和があり、人々は女王の仁徳の故に名誉ある生活を送っている、と女王の統治が称賛されている。」(サフィヤ・バーノー、上掲書、p.321)

第8回詩会 (1875年1月30日 詩題「満足」)

アザーードを含めて17名の詩人が参加し、満足を勧め、食欲を諫める内容の作品を発表した。満足して生きることの重要性を直接的に説く詩もあれば、物語仕立にしてあるものもある。

「ムッラー・グル・ムハンマド・アーリーは、まず、満足を称賛する8詩句を聞かせ、それから44詩句と32詩句からなる二つの物語を聞かせた。冒頭の詩句の内容は大体こうである——満足する者は物事に囚われず、現世、来世に幸福を得る。神は満足する者を喜ぶ。満足の喜びを持つ者は、貧困の悲しみを知らない。」

「それからハーティムの物語が詩にされている。その物語は何かというと、実はハーティムと或る貪欲な者との長い対話である。その中では満足が称賛され、食欲の欠点が述べられている。最後にハーティムは、扶養者たる神が与えるだけの糧に満足すべきであることを貪欲な者に認めさせる。万人に糧が与えられるのであり、母の胎内の子供のお腹ですら満たされるのである、と。」

「二番目の物語もハーティムの物語である。或る青年がハーティムを家に招待した。ハーティムは三つの条件でその招待を受け入れた。すなわち、坐りたい所に坐る、自分の好きなように食べる、そして第3の条件はその青年の家に行った時に教える、という条件である。この青年はハーティム以外の人をも招待した。ハーティムは青年の家に着くと食事の席の末席に坐った。青年が抗議するとハーティムは条件を思い出させた。青年は黙り込んだ。食事が始まるとハーティムは袖の中から大麦のパンを取り出し、神に感謝しておいしそうに食べ始めた。青年は再び文句を言っ

たが、第二の条件を思い出し、そしてハーティムの主張もあって黙り込んだ。食事の後、ハーティムは熱く熱せられ、赤くなった3枚の鉄板を持ってこさせた。それらを置かせ、悠然とそれらの上を歩き、こう言った、満足している者にはいかなる害も決して及ばない、と。」(サフィヤ・バーノー、上掲書、pp.331-332)

「第8学年の学生ジュワラー・サハーエ・カーヤスト・クッラム (Juwālā Sahāe Kāyasth Khwurrām) は、まず6詩句を満足を賛美するために詠み、そして16詩句で短い物語を詩にしている。最後に学生のために祈願している。」

「最初の6詩句の中で、私に満足を教えてください、と神に祈っている。物語はおよそ次のようなものである——二人の王様がいた。一人の王様は満足を知り、民衆は忠実であった。もう一人の王様は貪欲で、民衆はその欲望のためにとっても困っていた。遂に、ある日、両者の軍隊の間に戦争が起こった。貪欲な王様の軍隊はこう決定した、満足を知る王様を自分達の王様にしよう、と。」(サフィヤ・バーノー、上掲書、pp.336-337)

第9回詩会 (1875年3月13日 詩題「文明」)

この詩会に関してサフィヤ・バーノーは、サイイド・アスガル・アリー・ハキール (Sayyid Aṣghar ‘Alī Ḥaḡīr) とラフィークのマスナヴィーを紹介している。

ハキールの104詩句からなるマスナヴィーの内容は、次のようなものである——

美しい朝の光景に見惚れていると、一人の美女が声をかける。私はその美女に世間に対する不満を訴え、自分の苦しみを話す。すると美女は慰めてくれ、王女「文明」の宮廷に連れていってあげましょう、と言う。その美女の名を尋ねると、その名は「仁徳」(Muruwat) であること、そして王女「文明」に会いたいという人をその宮廷にまで連れていくのが仕事であることが分かる。私は「文明」のためにカスィーダを作る。

途中で「徳性」(Khulq) という名の人が現れ、王女は詩人に早く会いたいとそわそわしておられる、と告げる。私は王女に会い、カスィーダを捧げる。王女はそれが気に入り、「仁徳」と「徳性」を褒美として私に授ける。

154詩句からなるラフィークのマスナヴィーの内容は、次のようなものであった——

絶望と悲しみに覆われた夜、詩人は世に対する不満を語る。世の中は乱れ、無知の暗黒が覆っている。文明は枕許に立って泣いている。人々は自分の得になることしか望んでいない。そして尊大である。自分のことしか眼中になく、見えっぱりで怠け者、悪意があり、冷淡で貪欲、そして死を思わない。

様々な人を批判してから詩人は言う、慈悲、正義、誠実、神への恐れ、忍耐、神への信頼、温厚、品位、仁徳、同情といった資質を持ち、学識に満ちた人、そういう人こそ人間と呼べるのだ、と。

「心」、「理性」、「思考」、「方策」、「目」、「知識」、「公正」がそれぞれ優劣を争うが、最

後に「運命」が、私がいなければ君達もいない、と言って皆を黙らせる。

朝の情景の描写でこの詩は終わる。

サフィヤ・バーノーによると、この詩の中でラフィークは、明確な形でではないが、アーザードを批判しているとのことである。第3章本文中で、ラフィークはアーザード派の詩人であったが、これは訂正しておく。

尚、第10回詩会（開催年月日不詳 詩題「徳性」）で発表されたものとしてサフィヤ・バーノーは、アーザードのマスナヴィー「真の品格」（Sharāfat-e ḥaqīqī）とファイズという詩人の詩を挙げているが、ファイズの詩は7詩句しかない。内容は、直載に徳性や優しさの必要を訴えるものである。

付 記

- 1) サフィヤ・バーノーの記述によると、詩会ではマスナヴィー以外の詩型の詩も詠まれており、ベルシャ語で詩を発表する者もいた。
- 2) 参加した詩人については詳細が不明であるが、ギャルサン・ド・タッシー、カイフィー、アーガー・ムハンマド・バーキルによると、政府の翻訳官や会計官、教師、学生、新聞編集者などが詩会に参加している。
- 3) 参加詩人の人数の中には、作品を送付しただけの者も含まれている。

資 料

アーザードの講演 (1874年)

聴衆の皆様。今日、私がここに参りましたのは、それに口を出すのは私の身の程を越えているような或る事柄についてお話するためであります。何故ならそれは、実は、世界の人々がインドの国と呼んでいる広大な国の言語に関するものであるからです。そのありさまは、愛国心がどうしても沈黙させてはおかないような状態になってきております。その事柄とは一体何でしょうか。それは我々のあらゆる種類の主題の表現、一般の著作そして娯楽の手段であるウルドゥー語の詩文であります。今はインドの言語を調査するために古い土台を掘り起こしている時ではありません。ですからこう言うだけで十分です、我々の現在の言葉、すなわちウルドゥー語は実はインドのブラジ・バーシャーであると。それにペルシャの旅人が来て定住し、そして家の主人はその招きもしない客に、寛大にもその気に入るような場所を与えたのです。

誰もが知っているように、ブラジ・バーシャー自身、当時、一般的な言語でありましたが、しかし、宮廷や学問に対しては（その）母親の支配がありました。すなわち、サンスクリットであり、その膝の上では雄弁と修辞の河が体をくねらせていたのです。そしてブラジ・バーシャーは、家庭での雑用に関する事柄、市場での品物の取引きについて、貴賤の区別なく、その必要を満たしていたのです。バーシャーは学問、著作の言語ではありませんでしたので、それでは隠喩や直喩による散文の繊細さはサンスクリットに於ける程の高みには到達しませんでした。にもかかわらず、それは、如何なる時でも、見事に、そして美しくその内容を十二分に表現していました。そのあたりの事情は知っている人は知っております。

バーシャーからウルドゥー語が生まれると、数百年間それには話し言葉しかありませんでした。つまり、著述や著作の段階には達しませんでした。しかし、如何なる大地も植物なしではおられないように、如何なる言語も詩なしではいられません。すなわち、断片的な詩句は数百年前からウルドゥー語で伝わっていたのです。シャージャハーンの後、現在の言葉の年齢が百才となると、ワリーという詩人が誕生し、そして同時にあちらこちらで詩集が編纂されるようになったのです。

ウルドゥー語の主人というのは、元々ペルシャ語を用いていた人々の子孫でありました。それで彼らは、あらゆるペルシャ語の韻律やペルシャ語の興味深く、色彩豊かな思想そして様々な文章の写真をペルシャ語からウルドゥー語に移しとったのです。驚くべきことに、それは非常な優美さ、美しさを生み出したので、ヒンディー・バーシャーの思想——それはこの国特有の風土に基づいていたのですが——それをも消し去ってしまいました。すなわち、貴賤を問わず人々はパピーハー鳥やカッコウの声、チャンパーやジャスミンの香りを忘れてしまったのです。ハザール鳥やブルブル鳥、黄水仙やヒヤシンスといった一度も見たこともないものを称賛するようになったのです。ルスタムやイスファンディヤールの勇気、アルワンド山やベーストゥーン山の高さ、オクサス河、シル・ダリア河の流れは嵐を起こし、アルジュナの勇気、ヒマラヤの緑なす山々、

雪に覆われた頂き、そしてガンジス河、ジャムナー河の流れを全くせき止めてしまったのです。

無論、ある点で我々はペルシャ語に感謝しなければなりません。というのも、そのおかげで我々の言葉に飛翔力や情熱の力が生まれたのですから。その隠喩や直喩によって数多くの繊細で精緻な思想を表す力が生まれたのです。これらの思想はペルシャ語の詩文から来たものですから——その花園では非常に微かな隠喩の微風が芳香を拡げており、そして非常に精妙な直喩の夜露が輝きを与えているのですから——これらの花々の香りもこの言葉の中に移って来たのです。勿論、その思想の飛翔力と繊細さは限界を知らないような段階にあるのですが、しかし、真の主題を探してみると、繊細さと言葉の暗闇、隠喩の闇の中の一匹の蛍であって、きらめいたかと思うと消えてしまうのです。

おお、雄弁の花園の庭番である皆さん！ 雄弁とは、誇張や飛翔力の翼で飛び、カーフィヤの羽でパタパタ飛んでゆくこと、美辞麗句と単語の威厳の力で天まで昇ってゆくこと、そして隠喩の底に沈んで消えてしまうことを言うのではないのです。雄弁さとは次のことを意味するのです。すなわち、喜びや悲しみ、或る物に対する好みやそれに対する嫌悪、或る物に対する恐れや恐怖、或る物への怒りや憤り、要するに我々の心にある思いを叙述することによって、実物の観察によって生じるような、まさにそのような感銘、感情、情熱が聞いている人々の心を覆うということなのです。勿論、誇張の力、直喩や隠喩の塩は言葉に面白味と或る種の感動を増やしはします。しかし、塩は塩である程度に必要なものであり、料理全てが塩であってはならないのです。直喩や隠喩は、我々の表現の中では何か戦場や宮廷や庭園の絵の、その姿をより輝かせるガラスのようであればなりません。絵の真の姿を全く見せないようなガラスであってはならないのです。では、今、我々は何を為すべきなのでしょう。我々は自分の必要に応じて隠喩や直喩やイザーファの簡潔さをペルシャ語から採り、簡明さ、事実の描写をバーシャーから学ぶべきなのです。しかし、にもかかわらず満足するのは正しくありません。何故なら、今や時代の色が少し異なったものになっているからです。少し目を開いてみると、雄弁と修辞の博物館が開いているのが見えるでしょう。そこではヨーロッパの諸言語が、各々の著作物の花束、首飾り、冠を手にして立っているのです。そして我々の詩は、手に何も持たず、一人立って驚きの目で見ているのです。しかし、今やそれもまた、自分の手をとって先へ連れていってくれるような誰か勇氣のある人が現れないか、と待ち侘びているのです。

わが同胞の皆さん！ だからといって私が皆さんの詩を装身具に事欠くものと言っているとは思わないで下さい。そうではないのです。それは自分の先祖から長い長い礼服、重い重い装身具を受け継いでいるのです。しかし、残念ながら、礼服は古くなり、装身具は時が流行遅れのものにしてしまったのです。皆さんの祖先、そして皆さんは常に新しい主題そして新しい様式の創始者でありました。しかし、今日の時代に合っている新しい様式の礼服や装身具は英語の衣装箱の中にしまわれているのです。それは我々の脇に置かれているのに我々は気づかないのです。もっとも、衣装箱の鍵は我々の同胞で英語を知る人々が持っています。今や私は別の方に注意を向け

なければなりません。すなわち、おお、英語の資本を持つ皆さん！ 皆さんは自分の国の詩がこのような有様にあるのを見ているのに、皆さんは悲しまない。皆さんの先祖の思い出の品が今まさに消え去ろうとしているのに、皆さんはその痛みを感じない。それが自分の状態を正し、何処かに謁見に行けるようになるように自分の金庫や新しい倉庫を用いてはいないのです。これは祖国への義務なのです。借りることよりもそれを支払うことが必要なのです。

パーシャーにベルシャ語が影響を与え、そしてそれからウルドゥー語の詩文は或る独特の優美さを獲得しましたが、これはパーシャーとベルシャ語双方を知っていた人々のおかげでした。皆さん、考えてみて下さい。当時のパーシャーとベルシャ語の状況は、今日まさしくウルドゥー語と英語の状況と同じなのです。ですから、詩の中にもし英語の思想の反映が得られるならば、それはその二つの言葉を知っており、英語の如何なる趣向や思想がウルドゥー語にとって美しい装身具たりえるのか、ということを理解するような人々のおかげであることでしょう。

おお、わが同胞の皆さん！ 私はとても残念に思っているのです。表現の力、内容の情熱そして趣向と技巧の道具を皆さんの先祖は、皆さんの言葉がどれにもひけをとらないくらいに残していつてくれたのです。ただ、それらがいくつかの不適當な領域に囲まれて閉じ込められてしまったという欠点があるのです。それは一体何でしょうか？ 恋愛の主題です。そこには、少しばかりの逢瀬の歓喜、多くの悲哀と悲嘆、それにもまして別れの涙、酒、酌人、春、秋、天への恨み言、そして繁榮する者達への追従があるのです。これらの主題は全く空想的で、いくつかの場合、理性が働かない程複雑でほとんど関係のない隠喩で表されているのです。彼らはそれを綺想、繊細な詩想と呼び、自慢げに口髭をひねるのです。悲しむべきことに、この限られた領域からほんの少し出ようとしても、足を上げることができないのです。すなわち、もし何か実際の出来事や知的な主題や道徳的な内容を詩にしようとする、それを表現するのが嫌になってしまうのです。

実際、我々が自分の力を中味のない、ありもしない事柄に浪費しており、そして才能の宝庫を役に立つ所に用いることができず、無益に散財しているということ、このこと以上に残念なことがあるのでしょうか。英語の中に、あらゆる種類の主題と内容が散文よりもはるかに美しく詩作されているのを見るとき、どれ程羨ましく思えることでしょうか。全く、言葉には命が吹き込まれ、内容の命には恵みが与えられているのです。しかし、我々にとって何になるのでしょうか。聞いて残念に思ふべきです。自分を見て恥じ入るべきです。ああ！ 我々が書いている片言の散文ほどの力が詩に於いてもあったならば。その素晴らしい見本は英語の中にあるのです。にもかかわらず我々は見ると、我々の祖先が、ラディーフやカーフィヤと共に、もしやる気を出せば誰にもひけをとることのないような快い韻律や繊細な詩想の資本を我々に残してくれているということ。

おお、我が同胞の皆さん！ 同情の目は涙を流すのです、数日の内にこの流行の詩を作る人すら一人もいなくなってしまうと思われる。その理由は、評価のなさの故に、もう作る人が生まれられないであろうからです。いくつかの古い偶像が残ってはいますが、それらは朝の灯火なのです。

我々の言葉は、或る日、詩を全く持たないようになってしまい、そしてウルドゥー語の詩の灯りは消えてしまうことになるのです。

我が同胞の皆さん！ さあ、来て下さい。後生ですから自分の国の言葉を憐れんで下さい。さあ、立って下さい！ 祖国と祖国の人々の昔からの名声を破滅から救って下さい。いくつかの限られた領域に、いや、いくつかの鎖に縛りつけられつつある皆さんの詩を自由にする努力をして下さい。さもなければ、皆さんの子孫は、その言葉が詩の名を全く持たないような時代を見ることになってしまうでしょう。この祖先の栄光、祖先の偉業から遠ざけられてしまうのは非常に悲しむべきことなのであります。

無論、当面の間は、この作業はいささか困難であります。何故なら、この限られた領域の中に存在しているものは、百五十年に亘って今日まで非常に優れた言葉の達人達が朝夕考え抜いて生み出したものだからです。心血を注ぎ、頭をしぼってはじめてこの素晴らしい思想、磨かれた言葉、清新な連語、美しい彫琢、内容の熱気、表現法の目新しさが生まれたのであり、聞く人々の耳に感動を与えているのです。もし誰か詩作に向けた人が、目の前にあるありふれた物の中から望むものを取り、それについて詩を書いてそのような妙味を作品の中に生み出そうとしても、それは今日極めて難しいことなのです。全世界の称賛そして我々の感謝はあの墓の上に花を振りまいています。そこに眠っている人々がその狭い領域の中で為し遂げたことというのは、そうした人々が生まれ、あのような努力をし、あのように精妙で美しい表現法が広く言葉に現れ出るのに何年も何年もかかることなのです。

とはいえ、我々は絶望してはなりません。もし努力をすれば、我々もまた何かしら為し得ることでしょう。デリーは一日で花園となったのではないのです。さらに、今日まであの領域を賑わしてきた内容たるや、それ自体、呪われた悪魔がその全ての毒をたっぷり満たし入れた恐るべき内容なのです。もし誰か詩人の言葉に自然の面白味が少ないとしても、先程述べた詩題はその熱気で起爆剤のように詩句を吹き上げるのです。もっとも、一般的な内容にそのような輝きを生み出すためには、或る種の、言葉と表現の天与の才や高度の真の雄弁さが必要なのです。それらがある時、各々の内容は熱せられ、聞く者の心は感動に奮えることになるのです。長い間、私や多くの同胞はこのことを考えております。けれども、今、講演で取り上げましたのは、昨今、我々の政府と我々への教育の責務を心に感じておられる高官の方々が、それに関心を向けられたからであります。全く、我々の文学の進歩の星にとってめでたき時刻なのであります。このような時、我々のささやかな努力でも大きな成果を上げることになるでしょう。

我が同胞の皆さん！ 皆さんの社会は二つの集団から成り立っています。一つはヒンドゥーであり、もう一つはムスリムであります。ご存じでしょうか、ヒンドゥーとはどういう人達であるのか？ ヒンドゥーとは、今日我々が欲していることがその言葉の真の精髓であるような人々なのです。もしパーシャーがあるなら、それは真実の状態を表現するのに最上のものなのです。サンスクリットの詩作力自体も、言葉で言い尽せるようなものではありません。詩的内容は言うに

及ばず、それは歴史から地理、医学、論理学、法学に至るまで、選び採った学問はすべて詩の型にはめこんでいるのです。もう一つの構成要素はムスリムです。その先祖はアラブで、アラビア語は、男はともかく、家の女たち、いや、女中ですら議論に熱中すると、その言葉が一つの力強い詩となってしまったような言語なのです。これは一体残念なことではないでしょうか、このような先祖を持った子孫が先祖の遺産から離れてしまっているのは？ これは一体嘆くべきことではないでしょうか、今日、我々の言語が感動の言葉を欠いてしまっているということは？ これは一体悲しむべきことではないでしょうか、他の人々の前で我々の言語が表現の脆弱さと並んで千もの欠陥の故に非難されるのは？ おお、インドの大地よ！ もし汝の中にイムルウ・ル・カイスやラビードがいないならば、誰かカーリダーサを生み出すのだ！ おお、インドの砂漠と荒野よ！ フィルドウスィーやサアディーがいないならば、誰かヴァールミーキを生み出すのだ！

知る者は知っているのです、詩作には先ず天与の才、それからいくつかの後天的、知的能力が必要だということ。それから十分な熱意、継続的な修練が必要だということ。私は散文の分野に於いても騎兵ではなく歩兵であります。そして詩では塵芥。しかし、純朴さを見て下さい。どの分野でも走る心づもりがあるのです。これはただ、ひょっとしたら我が国にとって何か役に立つことがあるのではないかと思つてのこと。それらを詩と言うのは恥ずかしいのでありますが、私は最近いくつかの詩をマスナヴィーの形で、様々な内容について書きました。夜の情景について書いた一つのマスナヴィーをこれから披露したく思います。

註

アーザードの講演は、『アーザード詩集』（ムハンマド・イブラーヒーム編集による初版、二版、アーガー・ムハンマド・ターヒル編集による三版及びムムターズ・アリー版）や『アーザード論文集』第1巻に収められているが、ここでは、Muhammad Ibrāhīm, ed., *Naẓm-e Āzād*, Lahore, 1899に収録されているものを使用した。

どのテキストもほぼ同じ内容であるが、ムムターズ・アリー版『アーザード詩集』に収録されたものでは、最終パラグラフの末尾が他のテキストとは異なり、「それらを詩と言うのは恥ずかしいのでありますが、私は最近いくつかの詩をマスナヴィーの形で、様々な内容について書きました。」という文章の後が次のようになっている。

「しかし、意味の画家達に描かせたい絵があるなら、見本としてその素描を見せなければなりません。もし、才智ある人々が私を笑いとばすのであれば、笑いとばせばよいでしょう。私は一向に気にならないのです。何故なら、笑いは喜びの一つのしるしだからです。もし私がわが国にとって笑いの材料であるなら、私には悲しみなどなく、むしろ満足があるのです。ですから、夜の有様について私が書いた一つのマスナヴィーをこれから披露したいと思つています。具眼の士は、自由がその中でいくつかの束縛を打ち破っていることを認めることでしょう。その一つは、マスナヴィーではあるものの、マスナヴィーでよく使われる一般的な韻律の外へ足を踏み出していることであります。その理由は、そういった韻律には余地が少ないということでもあります。と同時に、マスナヴィー特有の韻律は、どの宗教も特有なものとはしていないからであります。我々が、一般的に、あらゆる種類の主題について詩作しなければならない今、もし我々がカスィーダやガザルの韻律でマスナヴィーを作っても少しも罪とはならないでしょう。」

パンジャブ協会に於けるウルドゥー詩刷新の試み (V)

元々マスナヴィーには特に決められた韻律はないという批判が行われたので、アーザードはこの部分を削除したようである。(Muhammad Šādiq, *Āb-e Ḥayāt ki Ḥimāyat men aur Dusrē Maḏmīn*, Lahore, 1973, pp.72-74を参照)

尚、ムムターズ・アリー版では、この講演には「ウルドゥー語の詩文」という標題が付けられており、最後に1874年5月8日の日付がある。(他の版には特に標題は付けられていない。)

正 誤 表

「パンジャブ協会に於けるウルドゥー詩刷新の試み (I)」 (『大阪外国語大学論集』第1号 1989年)

	誤	正
167ページ、下から3行め 及び186ページ、上から24行め	lahore	Lahore
171ページ、下から2行め	『今日のウルドゥー文字』	『今日のウルドゥー文学』
174ページ、上から20行め	ulūm	‘ulūm
180ページ、上から16行め	探った	採った
181ページ、上から4行め	3月30日	3月13日
181ページ、上から15行め	Kāshimīrī	Kāshmīrī (185-188ページの註の中でも同じ)
186ページ、上から25行め	<i>Muntakhaba</i>	<i>Muntakhabah</i>
187ページ、上から15行め	行なうべし	用いるべし

「パンジャブ協会に於けるウルドゥー詩刷新の試み (II)」 (『大阪外国語大学論集』第3号 1990年)

	誤	正
103ページ、上から5行め	figures	figures
103ページ、上から8行め	Like other in people in Dilhi	Like other people in Delhi
107ページ、上から10行め	Johnson Addison	Johnson, Addison
108ページ、上から12、13行め	カーシミリー	カーシミリー
108ページ、下から1行め	35名	34名
111ページ、上から9行め	こういった講演活動の他、	トル
113ページ、上から5行め	発表した	行なった

パンジャープ協会に於けるウルドゥー詩刷新の試み (V)

115ページ、下から8行め	答えられました。	答えました。
115ページ、下から6行め	ですから、あなたが	ですから、あなたが
116ページ、上から8、9行め	諸君には、神様は言葉に力を与えて下さったのですから	諸君に対して神様は言葉に力、作品に力、弁舌にも力を与えて下さったのですから
117ページ、下から1行め	それは ^{ほしため} 端女よりも辛いことなのだ。	それが ^{ほしため} 端女よりも辛いということなのだ。
118ページ、下から1行め	この国の、広汎な言葉	広大な国の言葉
120ページ、上から15行め	ウルドゥー詩	ウルドゥー語
120ページ、上から16行め	両方を知っていた人のおかげであり	両方を知っていた人であり
120ページ、下から7、6行め	成功の祝辞	繁栄する者達への追従
121ページ、上から1行め	嘆く	羨む
121ページ、上から1行め	我々は一体？	我々には一体？
121ページ、上から14行め	価値のなさ	評価のなさ
122ページ、下から9行め	第2巻	第1巻
123ページ、上から12行め	この限られた所からも	この限られた所から
123ページ、上から12行め	つまらなくなつて	気分を害して
123ページ、下から3行め	追及	追求
125ページ、下から10行め	第二部	第三部

「パンジャープ協会に於けるウルドゥー詩刷新の試み (III)」 (『大阪外国語大学論集』第4号 1990年)

	誤	正
161ページ、上から13、14行め	Tha	The
161ページ、下から4行め	ヒンドゥスターニー	ヒンドゥースターニー
161ページ、下から1行め	検討することしたい	検討することにした
162ページ、下から12行め	1972年4号	1972年4月号

パンジャブ協会に於けるウルドゥー詩刷新の試み（V）

162ページ、下から10行め	Javīd	Jāvīd
163ページ、上から9行め	ムムターズ・アリー版は	ムムターズ・アリー版では
163ページ、下から15行め	“Tārē kā ‘ā shiq”	“Tārē kā ‘āshiq”
163ページ、下から12行め	“Miḥinat Karō”	“Miḥnat karō”
169ページ、上から2行め	モウラヴィー	マウラヴィー
169ページ、上から3行め	Mau’lavī	Maulavī
170ページ、下から4行め	世界や甦る様を	世界が甦る様を
172ページ、上から13行め	身を隠して	身を隠し、
175ページ、上から1行め	緑の衣も得たのです	緑の衣を得たのです
179ページ、下から13行～8行		この三つの詩句は連続したものではありませんので、各詩句の間を離す
180ページ、上から12行め	11名	10名
181ページ、下から5行め	裳裾をも	裳裾を
183ページ、上から5行め	観念と想像の中に美しさ	観念と想像の中の美しさ
183ページ、上から13～14行	喜びのそして悲しみの時の我が友 山のそして荒野の我が仲間	喜びの、そして悲しみの時の我が友 山の、そして荒野の我が仲間
185ページ、下から10行め	統治法方	統治方法
186ページ、下から1行め	姿を表わした	姿を現した
189ページ、下から14行め	昼と夜の	夜と昼の
189ページ、下から11行めと10行めの間		一行あける
190ページ、上から13行め	友への悲しみ	友への想い
193ページ、上から14行め	誰か	誰が
194ページ、上から11行め	取るに足らないのです	取るに足らない者とされるのです
195ページ、下から13行め	Husain	Husain

パンジャブ協会に於けるウルドゥー詩刷新の試み（V）

196ページ、下から18行め	<i>Mezāmīn</i>	<i>Mazāmīn</i>
196ページ、下から14行め	「自然の歌」 <small>ネブヤー</small>	「自然の詩」 <small>ネブヤー</small>
「パンジャブ協会に於けるウルドゥー詩刷新の試み（IV）」（『大阪外国語大学論集』第6号 1991年）		
	誤	正
167ページ、上から17行め	その中で高貴な者達と思われた者達は	その中で高貴であると思われた者達の
168ページ、下から2行め	命令と法律は特定の家にとどまるものではなく	命令と法律は特定の家に関じ込められたものではなくなり
171ページ、下から4行め	18名	17名
173ページ、下から7行め	何も	何の
176ページ、上から8行め	ギャルサン・ド・タッシーは、	ギャルサン・ド・タッシーは1876年に行なった講演で、

尚、『パンジャービー・アクバール』と『パンジャービー』紙、公教育局と教育局とは同一のものである。

(1992. 5. 12 受理)